

近世・近代初頭における施主の建築生産への介入と現代における施主の可能性に関する考察 ～施主 原三溪を中心として～

建築デザイン研究室 A99T308 岡田 愛

1. 研究の背景

近年、住宅に興味・関心を抱く施主は多い。だが、建築家に依頼して家を建てたり、一番理想に近い家を探しそれを買おうとする施主が大部分であり、これは家作りにおける多くの判断を建築家やハウスメーカーに委ねている事に他ならない。

一方、近世・近代初頭における施主の中には、大工と相談を重ね、大工を監督・指図しながら、自らも判断をくり返す事で家を建てるものがいた。彼らの大半は、趣味として家を建てる事のできる富裕層の人々であった。彼らの家作りは単なる道楽だと捉えられがちであるが、この趣味としての家作りの中にこそ、本来施主が持っている可能性を見出せるのではないだろうか。

では、そもそも「施主」とはどのような人の事を指すのであろうか。

2. 研究の目的と方法

本研究では、近世・近代初頭の具体的な施主を例にあげる事で、当時の施主が建築生産にどのように介入していたのかを示し、当時の施主の建築生産における位置づけを行う。それと同時に「施主」という言葉を再定義し、さらには現代の施主が建築生産に介入する事における可能性について考察する事を目的とする。

具体的な施主を例にあげるにあたっては、主に数寄屋における施主を取り扱う事とする。数寄屋ほど施主の“好み”が色濃く表れているものはないと考えるからである。選出した施主とその人物が関わった建物を以下年代順に示す。

石川丈山	(詩仙堂、京都市左京区1641年)
頼山陽	(山紫水明処、京都市上京区1828年)
藤田伝三郎	(藤田綱島邸ほか、大阪市都島区1870年頃)
益田鈍翁	(御殿山碧雲臺ほか、品川区1873年頃)
高橋篤庵	(一木庵ほか、港区1917年)
原三溪	(三溪園、横浜市中区1902～1922年)
渡辺金蔵	(二笑亭、深川区1927～1931年)
大河内伝次郎	(大河内山荘、京都市右京区1931～1962年)

3. 近世・近代初頭における 8 人の施主に見る建築生産への介入とその評価

表 1：6 項目についての調査

項目	
建築設計への関わり	石川丈山、頼山陽、藤田伝三郎、高橋篤庵、原三溪、渡辺金蔵の6人が自ら設計を行った。藤田、原、高橋の三人は図面も自ら作製した。
指示の細かさ	頼山陽、藤田伝三郎、益田鈍翁、高橋篤庵、原三溪、渡辺金蔵の指示は建具にまで至る。渡辺は畳のへりの材質まで指示した。
職人との関わり	いずれの施主も職人との関わりは深い。益田鈍翁の碧雲臺には植木屋大工といった職人の家が並んでおり、彼は職人の家族をも大切にしていた。
材へのこだわり	いずれの施主も材にこだわりを持つ。渡辺金蔵は異常なほど鉄にこだわり、益田鈍翁、高橋篤庵、原三溪は古材にこだわった。彼らは自材を探す事もあった。
庭設計への関わり	石川丈山、頼山陽、藤田伝三郎、高橋篤庵、原三溪の5人が自ら設計を行った。大河内伝次郎は庭師とともに30年もの歳月を庭作りで費やした。
庭木・庭石へのこだわり	藤田伝三郎、高橋篤庵、原三溪の3人が特に関わりを持つ。高橋と原は庭木や庭石を自ら採した。彼らは加蓋石を庭に配置した。

数寄屋に関する書は多いが、「施主の建築生産」という視点から書かれている書は非常に少ない。ここでは、施主本人が書いた日記、他者が施主について書いた伝記や小説、さらには施主が関わった建物の解説書を用いて、先にあげた 8 人を、まずは 6 項目について調査した(表 1 参照)

この調査は、資料の量にバラ付きがあり、偏りも見られるが、建築生産への介入という視点で見ると、原三溪の事例が総合的であると考えられる。よって、以降は原三溪の建築生産への介入を特に取り上げ、そこに施主の建築生産への介入における可能性を見出す事とし、他の施主についても対比的に述べる事とする。

4. 施主・原三溪の建築生産への介入とそこに見る施主の可能性

4-1. 原三溪・三溪園について

原三溪(本名:富太郎)は 24 歳の時、輸出貿易の花形である生糸商原家の婿養子となり、生糸商として大を成した。富太郎は大実業家であると同時に、大茶人であり、新鋭芸術家を激励・育成する大パトロンでもあった。そして原富太郎最大の文化的貢献ともいえるのが、三溪園の造営であった。

三溪園は、横浜市本牧三之谷に広がる面積 17.5 万平方メートルの日本式庭園である(図 1 参照)。これは先代が購入した土地を、富太郎が私財を投じて名園に仕立て上げたものであり、明治 39 年より一般に公開された。地形が三つの渓谷を持つ事から「三溪園」と名付け、富太郎自身も「三溪」と名乗るようになった。園内には全国各地から古建築が移築されており、それらはいずれも歴史的遺構として貴重なものであり、十棟が重要文化財建造物に指定されている。

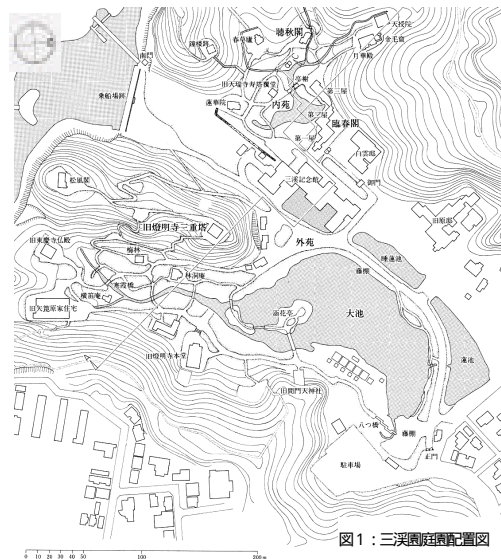


図 1：三溪園庭園配置図

4-2. 古建築の改造に見る三溪の思想

最初に三溪園は、三溪がひとりで構想、蒐集、造営したものである事を強調したい。三溪の庭園造りは、世の

権力者や富豪の庭園造りとは異っており、「自ら構想を練りに練り、庭園に配置すべき古建築を各地を訪ね歩いてさがしもとめ、買って解体し、移送」¹⁾するというものであった。

古建築の移築において、三溪が最も力を入れたのが臨春閣である(図3)。三溪はこの古建築に大幅な変更を加えた。すなわち、第一屋に接していた第三屋を切り離し、向きを180度変えた上で、第二屋の反対側にやや離して接続させたのである。

早川正夫によれば、この変更は「三溪自身の生活への適応」²⁾に多くの苦心が払われた結果であるという。三溪は古建築への尊敬の念を抱きながらも自分の生活の場を構築する事を躊躇しなかったのだ。

三溪はさらに屋根を葺き替えており、移築の前後を見比べるとその差は歴然であり、彼の改造は成功していると言えよう(図2、図3)。

三溪は、臨春閣以外の古建築にも手を加えたが、ここで重要となるのは、三溪は古建築を十分に評価した上で、このような改造を行ったという事である。これは、古建築の持つ奥深さを認めた上でさらに、その建築が未来にあるべき姿を提示していると言い換える事ができるのではないか。三溪が、私庭に古建築を蒐集したのは、単にそれらを保存するためではなく、古建築を改造する事を通して、彼が考える建築の理想像を世に示すためでもあったのだ。

図2：臨春閣（移築後）



図3：臨春閣（移築前）

4 - 3. 命名に見る思想

三溪は移築した古建築に対して、それまで名前のあったものにもなかったものにも、原則として新たに名前を付けている。「臨春閣」「春草廬」「聴

秋閣」「月華殿」「蓮華院」「金毛窟」などいずれも例にもれない。三溪にはこれらの建物への愛情、これらは全て自らが集めたものだという満足、移築し改造を加える事によってさらに良いものになったのだという自信があったから新たに命名し直したのであろう。かつては全国各地に散らばっていた古建築が三溪プロデュースの庭園に蒐集されたのだという事を示すためにも、名前に統一感を持たせようと考えたのではないか。

ここで、名前というものは自分だけではなく、他人も呼ぶものでもあるという事に注目したい。三溪園内の建物の多くには、篇額が掛っている。篇額とは建物の名前を書いた表札のようなものだが、それを各建物に掲げるという行為は明らかに他者を意識したものであるといえる。三溪は三溪園、そこに移築した古建築を自らのものであると同時に他者からも見られるべき存在であるとして認識していたからこそ、三溪園を一般に公開したのである。

4 - 4. 小結 原三溪にみる施主の定義と可能性

三溪が行った古建築の改造や建物の命名といった行為は私的な行為ではあるが、明らかに周囲に影響を与える行為である。竹田道太郎は、三溪は「日本の文化的美意識復興を自分の財力で行なって、市民に提供し、日本文化の粋と直接親しんでもらいたい」³⁾との意向で、はじめから公開を考えていたとしている。たとえ財力を得ても、このような使命感に駆り立てられ、それを実行できる人はそうはいない。これを実行する事ができたのは、彼が庭園に対して、建築に対して、さらには美そのものに対して、これらは共有されて然るべし、という考えを持ち、さらには、これらに対して、はっきりとした独自のビジョンを持ち合わせていたからであろう。

このように原三溪を捉える事で、「施主」とは、「独自の家論を持ち、多少の犠牲を払ってでも、それを実行する人」とであると定義する事ができるであろう。さらには、施主には、建築生産に介入する事によって「自らの家論を周囲に提示できる」という可能性を見出す事ができるのではないだろうか。

これらの事は他の7人の施主にも、共通して言う事ができる。例を上げると、金を惜しむ性格であったという頼山陽は水西荘のためには莫大な出費をした。また、豪胆な実業家として有名であった藤田伝三郎も見積もり図の作成となると非常に細かい部分にまで気を遣い、その疲労が激しかったために不幸の病になったと言われている。

これらの施主にはそれぞれ、性格や立場の違いがあり、彼らの家論にも違いはあった。しかし、このように家作りに多大な情熱を持ち、決して他人任せにはしないという点においては共通していたと言える。「詩仙堂」「山紫水明処」「碧雲臺」「一木庵」「二笑亭」もまた彼らが付けた名前であり、彼らも篇額を掲げた。彼らも三溪同様、自らの家論を実践し、それを周囲に提示していたのであろう。「一つでも二つでも気に入った建築を後世に貽して未来の知己を待たうと思ふのであります」⁴⁾この高橋篤庵の言葉はそれを明らかに示している。

5. 考察 現代における施主の可能性

もちろん上記の可能性は現代の施主にも与えられている。だが、現代の施主は判断を他人に委ねているため、周囲がそこに見るものは、施主が思い描く理想の家ではなく、建築家やハウスメーカーの提示した理想の家であるというのが大方の現状である。

自ら図面を引いたり、煩雑な計算をするような必要はないが、少しでも多くの判断を施主が下す事で、より満足できる家になる事はもちろん、自分の家論を周囲に提示する事ができるのではないだろうか。

6. 結論

以上より、近世・近代における施主の建築生産への介入が積極的であったことがわかった。さらに、一個人の趣味としての家作りが公共性を持つに至る事があり、この公共性にこそ、現代の施主が建築生産に介入する事の意味を見出せると考える。

¹⁾ 白崎秀雄 「三溪 原富太郎」(新報社、1988年)

²⁾ 早川正夫 「数寄屋ノート二十章」(建築資料研究社、1998年)

³⁾ 竹田道太郎 「近代日本画を育てた豪商 原三溪」(有楽堂、1977年)

⁴⁾ 篤庵 高橋篤庵 「我築多羅」(篇文社、1914年)